

「障害があっても生き生きと」

むつ市立大平中学校 二年 田中 萌菜

「お母さん、あの人障害者じゃない？ 障害者って司会出来るの？」

テレビに映っていた司会者の言い方がハッキリしていなくて思わず言った一言でした。それに対して母は

「知的な障害がなければ出来ると思うよ。聞こうと思えば、何て言っているかちやんとわかるよ。」

と応え、私は自分の言った言葉にハッとしました。

障害があるってどういう事だろう。障害があれば、社会参加が出来ないのだろうか。自分は『障害』という言葉に対し、大きな勘違いをしているのではないか…。

障害をもちながらも生き生きと活躍している人がいる事を思い出しました。盲導犬を連れて、演奏していたトロンボーン奏者、楽譜が見えないので耳コピで練習をしている全盲のピアニスト、

豊者のピアニスト。彼女は、どうやってミスタッチを知るのだろうか。みんな『大変』なのに生き生きと生きていられるのだろうか。障害者は、不自由な事が

あって大変そうだと私は思っています。でも、最初から障害のある人は、『それが普通』と生きて生活しているという話を聞きませんでした。なぜ、そう思えるのだろうか。

そんな事を考えている時に、四年前に心臓の手術をして障害者手帳を持つている祖母の事を思い出しました。高齢の入院生活で足腰が弱くなり、退院後、一人での生活には心配が多いという事で、私やお婆の家で過ごしました。祖母の事を心配し、出来るだけ何もしなくても良いように考えました。私の家での生活では体力の回復がみられず笑顔が少なくなりました。ところが、お婆の家では、自分の事は自分でやらなければならぬというえに、お婆の遅いお婆に代わり、家族の食事を作ったりしていました。それなのに、夏休みにはとても元気になって帰って来たので、とても驚きました。

「危ないから」一体に負担がかからないように「と思つて母がしていた事は、祖母にとって「迷惑をかけている」「申し訳ない」という気持ちを作っていたのだと思います。逆に、お婆の家では自分の事は自分でやらなくちゃいけないし、人の役に立ちたいという気持ちがある。その気持ちで祖母の元気のもとになったのだと思います。

その後、祖母はリハビリをかねて、デイサービスに行く事をすすめられた時、

「自分一人でやれる事がたくさんある。人の世話になりたくない。」と嫌がっていました。今はそこで知りあった人に何かして、喜

んでもらった事を嬉しそうに私達に話しています。
この事から、「出来ない」事より「やらせてもらえない」事の方がつらいだろうなあと思いました。身体障害、視覚障害など他人にも分かる障害だけでなく、心に障害をもつ人、誰もが向かえる『高齢』に伴う障害など、その人達、それぞれが自分に自信をもち、社会の活動に参加出来たら、障害をもつ人も、その周りの人達も、生き生きと過ごせるようになると思います。
多少困難だと思ふ事に挑戦している時に、手助けをされると「一人でも出来たのに」と悔しく思ふ事があります。
障害を持つ人達もそんな気持ちでいる事があるのかも知れません。
どんな障害があったとしても、その人の、「何かしたい」「したい」「欲しい」にして欲しくない」という気持ちをよく考えていけたらいいなと思います。誰もが生き生きと活動出来るように…。
『人権』というとても難しく聞こえますが、自分の身近にもある事なのだと気づきました。